類題法文和歌集注解

一

塚田晃信編

古典文庫

塚田晃信編

類題法文和歌集注解

一

古典文庫

古典文庫第四七〇冊

昭和六十年十一月二十日印刷発行　非売品

類題法文和歌集注解
（一）

編者　塚田晃信
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1985. Printed in Japan

目次

凡例……五
類題法文和歌集注解
口上覚……九
類題法文和歌集注解序……一五
異域本朝仏法流派譜……二三
類題法文和歌集注解巻第一
天台宗……四三
法華開経　無量義経……四六
類題法文和歌集注解巻第二

妙法蓮華経……六一
序品第一……六八
十二因縁説……一〇七
六波羅蜜義……一二九

類題法文和歌集注解巻第三

方便品第二……一三七
十如是和歌……一三六
十界—詠十界和歌……一四九
譬喩品第三……一五九
信解品第四……一五五

類題法文和歌集注解巻第四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

薬草喩品第五……二七三
授記品第六……二八八
化城喩品第七……二九七
五百弟子授記品第八……三一二
授学無学人記品第九……三二六
法師品第十……三三六
見宝塔品第十一……三四七

凡例

一、駒沢大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』を忠実に翻刻した。

二、翻刻は次の方針に従った。

1、漢字・仮名の別、仮名遣い・送り仮名等は、稀に施してある濁点も含めて、すべて底本のままとしたが、漢字はおおむね通行字体に従った。

2、通読の便宜を考慮し、私意に句読点を施した。

3、底本の誤脱・誤字はそのままとし、明らかに誤りと認められる場合に限り（ママ）と傍注を施した。

4、便宜上各歌順に歌番号を付し、索引の検索に便ならしめた。

三、解説及び作者名索引・和歌初句索引等は最終巻に掲載する。

四、本書の成るに際して、翻刻をお許し下さった駒沢大学図書館に対し、深謝申し上げる。

昭和六十年十月三日

塚田晃信

類題法文和歌集注解

写二十七巻

駒沢大学図書館蔵

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

口上覚

一御仰付候法文類題注解出来仕候間、此度箱入に而廿七冊為相と申候、右之注解之趣意共、左ニ一書を以申上候、御不審之義も候ハヽ、御仰上被下度御座候、尚又、思召ニ相叶不申処も候ハヽ、別段調ヒ直シ可指上御座候

一廿七冊に而、帋数千六百枚余

一六十九　二百三　三百十六　四九十五　五五十五
六七十　七七十八　八六十　九六十五　十四十
十一四十五　十二六十　十三六十二　十四廿八　十五四十
十六八十五　十七五十九　十八四十　十九四十　二十四十

廿一四十　廿二五十五　廿三五十　廿四六十一　廿五四十五
廿六四十　廿七六十五

帋数右之通に而候、かりとち為致上申候

一真字序相加候、編集のむね大かた是く書のせ申候、第一仏家の者之さたニ、俗の注解ハ無用之由申候、右之段ハ、天台大師先達ニ申をかれ候、それも俗の義理にて仏を解し候ハ、無用にて候、仏家の注釈にたより解候へハ、さはり無之、此度之注解ハ、一向ニ聖人の書の義理にてハ無之、仏家の世々の注疏にもとつき解候故、相違なる事無之候、此段序へしるし候へとも、為念申上候、たとへは法花を注し候ニ、天台大師の玄義、文句、止観にもとつき候ことくにて候、八宗此心得にて候、宗門の外の説ハ、引不申候、よりて一宗

〳〵の筋、さハり無之候、御ついても候ハゝ、よき出家中へ此段御判断被仰付候様仕度候、あしき所も候ハゝ、直し可申候、先以此筋にて、俗のそしりはまぬかれ可申候

一禅十六 十牛へハ絵を相入申候、此事去歳玄珉を以被相尋置候故、此段申上候、よく済候様ニ書立申候

一諸経論数々引申候而、一式出所等無間違相記し候、義理も本経ゟ引考相違無御座候、元来八十余条しれさる事御座候処、段々考出来仕、わつか五ヶ条出処しれ不申候、此分ハおくへ不詳法文としるし置申候

一此御本、先年の御本は部類斗わけ宗門をわけ不申候、宗門わけ不申候へは、一宗〳〵の経の筋わかれにくゝ候故、此度ハ宗門をわけ申

候、其宗門のはしめニ、其宗門のはしまり候理合を、かな序ニ委細書立候、勿論経へも一経〳〵ニ其理をつまひらかニ序を仕り書立申候、是にて甚御覧直はされやすく可有之御座候、品々にも（頭注、品とハ寿量品なと云かことし）其段をくはしく序ニ書立申候、いつれにも御覧ニ早速入て、わかれよき様ニ仕候、此段よくゝ仰上度候、其経と其品の理合わかれ不申候へハ、歌の義済ても、全躰の理よくわかれ不申故、如此書立申候

一諸経論并名号并法語釈器なとの巻も、同様ニ其所〳〵に早くわかれ候様ニ、次第を書あらはし申候、其門大分ニ経論を引申候ハ、其経論をあけされハ、本義明らかならさる故、如此候、十如是（法花也）十界のことき、よくあちはひされは、本義明らかならす候

一十二因縁（法華也）なと申物は、一段〳〵にてハ候へとも、又一筋説候て済申物故、其末ニ一筋ニ説候、小序をかなにて注し申候、よく御覧被遊被下度候、是にてさつはり済可申御座候、此書ハ外之経書や和哥の書と違ひ、大分ニすぢむつかしくときにくゝ御座候、漸く此分ニもせわ仕り、埒明申候、彼是候段よろしく被仰上被下度御座候、以上

寛政弐年九月重陽

畑中多忠

長江甚三郎様

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton